

てがみ座 第14回公演



風紋

— 青のはて2017 —

作 長田 育恵

「2017年11月9日～19日 赤坂レッドシアター
11月24日・25日 知立市文化会館」

登場人物

宮澤 賢治

東北砕石工場技師。36歳。死の二ヶ月前。

夏井 巳喜雄（みきお）

仙人峠駅 駅舎兼旅籠の主人。アヤの舅。

夏井 アヤ

仙人峠駅 駅舎兼旅籠の手伝い。巳喜雄の義理の娘。

松峯 大悟（だいご）

仙人峠を根城にする運び屋。

桐島 三郎

遠洋漁業帰りの漁師。

工藤 俊作

都市からの失業者。実は特高警察。

志村 町子

元浅草金龍館の踊り子。

小畑 キミ（おばた）

貧村から売られる少女。

保阪 嘉内（ほさか かない）

賢治の盛岡高等農林時代の友人。

宮澤 トシ

賢治の妹。24歳のときに肺病で亡くなる。

一、峠①

一九三三年（昭和八年）七月三〇日、夕刻。

外は嵐。昨日の深夜から降り続けている。

岩手軽便鉄道終着の仙人峠駅、その駅舎兼旅籠。

仙人峠は、遠野と釜石の間にあり、昔から難所とされてきた地。

岩手軽便鉄道と釜石鉱山鉄道の途中にある。当時、岩手軽便鉄道は

花巻く釜石まで、途中にある急峻な峠に線路を通せず、岩手軽便鉄

道（花巻く仙人峠）と釜石鉱山鉄道（大橋く釜石）と分れていた。

旅人たちは軽便鉄道の花巻側の終着駅である仙人峠駅から、釜石鉱

山鉄道の大橋駅まで峠を徒歩で越えていた。九十九折れの険しい山

道で、歩いて三時間ほどの距離。峠からは北上の山並みの彼方に、

釜石の鉄工所の光と太平洋が望めた。

この駅舎兼旅籠は、峠越えする旅人たちの補給所となっている。

入口を入ると、土間と座敷。

土間には、水桶と掃除用具、旅行客用のベンチなど。

座敷は居間としても使われており、僅かな家財道具がある。

宿帳をつけるための座卓、筆や筆記用具。

片隅に仏壇。仏壇には壺が飾られている。

（のちに分かるが、壺の中には貝殻がいくつも入っている）

座敷から別座敷へ続く廊下。宿泊者はそちらに泊まる。

炊事場などもそちらにある。

駅舎兼旅籠の主人は夏井巳喜雄、その義理の娘アヤ。

巳喜雄の息子でアヤの夫の邦彦は、三月に三陸大津波で亡くなっている。

雨に振り込められた座敷では、巳喜雄と運び屋の松峯大悟、サイコロ賭博（チンチロリン）に興じている。

夏だが嵐のせいか肌寒く、二人はコップ酒を飲みながら、本日最後の花巻発の便鉄が到着するのを待っている。

巳喜雄、丼碗にサイコロを振り入れた。二人、碗の中を注目。

巳喜雄

シゴロ。

大悟

ああ？！

巳喜雄

悪イな。

大悟

なんがしてんじゃねえが？

巳喜雄
大悟
巳喜雄
大悟

馬鹿（ばが）言うでねえ。
クソッ！ もう一回！
やめとげ。今日の俺にや勝てねえぞ。
逃がすが。ゲツの毛まで筆りやがって。

二人、サイコロを振る。大悟の目が大きい。

大悟
巳喜雄
大悟
巳喜雄
大悟
巳喜雄
大悟
巳喜雄

うしッ！ 親だ。
（笑うが、脇腹）……痛エ、
腹でも減ったが？
昔の火傷だ。何年経っても、こつたな日にやジクジクしやがる。
可哀想になア。つって手加減しねえぞ。ほれ、さっさと賭げろ。
可哀想はおめえだ。（金を出し）——いいが？ 風が唸ってるべ。
ただの風だべ。

巳喜雄
大悟
大悟
大悟

違う。ありやあ怒（いが）ってんだ。花巻あたりから吹いてきた風が、遠野
ば越えて北上の尾根ば走るうち、この仙人峠さ追い込められる。窒息しそ
うな九十九折り（つづらおり）の山道で、とぐろを巻いて怒り出すのよ。雨雲
も北上の尾根さ引つかかってなかなか抜けねえ。ここさえ抜けりや釜石の海
なのに、さまあみる、仙人峠ば越えられねえ。俺アな、言っとくが、こつた
な日にや負けたこたアねえ。風神と雷神に峠の通行料ば、払わせてんのよ。
怖えな。……おい、んだば俺も貰っていいんでねが？ この雨じゃ、俺だち
運び屋は（商売）上がったたりだ。神さんよ、迷惑料寄せ！

大悟、丼碗にサイコロを叩きつけると一個が碗から飛び出る。

巳喜雄
大悟
巳喜雄
大悟
巳喜雄
大悟
巳喜雄
大悟

シヨンベン。（親負けの目）
待った！ 今の待った！
待つか。ほれ。
ちよちよちよ、
ほれ。
（探るが金がない）——次の汽車で客ばとる。絶対（ぜってえ）とる。
今おめえが言ったべ？ こつたな雨で峠越えする馬鹿いるが？
だからさ、足止め食らう分、焦る客もいるべ？ 一刻も早く釜石さ行きてえ
客が！ 岩手軽便鉄道はここ仙人峠で終わり。釜石さば峠ば歩いて越えて、
釜石釜山鉄道の大橋駅まで行かねばなんねえ。この一本道しかねえんだ。雨
がやんだら、すぐにも客乗せて峠越えしてやるよ。釜鉄の始発に間に合え
ば五倍貰う。

巳喜雄 ほう、言ったな？ んだば一筆書け。
大悟 は？
巳喜雄 えー借金は、今日のも合わせて……、
大悟 いやいやいや……俺とオヤッサンの仲でねえか。

アヤ、宿泊者用の手拭いなどを手に、奥の間から出てくる。

アヤ 何やってんの。
大悟 アヤさん！ 助けてくれ。
アヤ サイコロでしょ。大ちゃんもお義父さんもどっちもどっち。それよりいの？ そろそろよ。
大悟 おっと、そっだな時間か。

大悟、合羽などを羽織り、外に出て行く準備。

アヤ お義父さん、客用の布団、増やしときました。
巳喜雄 おお。この雨なら乗客全員うぢさ泊まるぞ。なあ、風神、雷神。頼むぞ！
大悟 やめろってそれ！

近くに雷が落ちる。

アヤ (小さな悲鳴)
大悟 ほらア、お怒(いが)りなすった！
巳喜雄 (笑う)

列車の警笛。

巳喜雄 来たぞ。今日の最終だ。
大悟 行ってくる。
巳喜雄 客ば掴まえてこいよ！

大悟、外に出て行く。
アヤ、大悟の後に続き、開いた戸から外の様子を見る。
吹き込んでくる雨風。
巳喜雄、サイコロと丼碗を片付けようと。
アヤ、戸を閉める。

アヤ お義父さん。やめてください。

巳喜雄 あん？

アヤ 今の。

巳喜雄 (サイコロ) 暇潰しだ。

アヤ そうじゃなくて。神さま呷るみたいなこと。

巳喜雄 ……無駄口でねえか。

アヤ、仏壇の前に向かう。そこに飾られた壺に向かって祈る。

さらに近く列車の警笛。

アヤ (背が震えて) ……、

巳喜雄、声を掛けようとするも掛けられず、コップ酒を呷る。

——雨の中をやってくる乗客たちの気配。

町子(声) もう、なんなのよ！

工藤(声) いいから走れ！

巳喜雄 おい。

アヤ はい。

アヤ、立ち上がる。その顔は切り替わっている。

巳喜雄とアヤ、慣れた呼吸で客を迎える準備。

巳喜雄、土間に降り立ち、アヤは客のための茶を用意する。

町子(声) 駅舎ってどこ！

工藤(声) ここだ！ 屋根がある！

巳喜雄、戸を開ける。

巳喜雄 こちらです。いらつしやいませ！

雨の中を最終の列車で着いた乗客たちが駆け込んでくる。

町子、工藤、鞆で雨をよけながら飛び込んでくる。

アヤ、客に手拭いを渡し、荷物なども預かっていく。

町子 ああもうッ！

巳喜雄 生憎の天気で。

町子 ほんとよ！ これだから田舎は、
アヤ どうぞ。お使いください。（手拭い）
工藤 ここ、仙人峠の駅舎？
巳喜雄 はい。
工藤 旅籠もあるって聞いたんだけど。
巳喜雄 それもこちらで。この辺じやうちしかありませんでね。駅舎も旅籠も郵便局も、なんでも兼ねております。
工藤 じゃ、とりあえず泊まれるのかな？
巳喜雄 もちろん。
アヤ こちら、宿帳にお名前お願いします。

桐島三郎、入ってくる。

桐島 すんげえ雨だな。海ん中さいるみてえだ。
巳喜雄 ……桐やか？
桐島 おう！ 巳喜雄さん！
巳喜雄 久しぶりだな！（と桐島を抱くが酷く臭い）……グッ！
桐島 わりい。臭がんな。風呂入っても抜けねくつてよ。マグロ船に一年も乗ってたがらなア。向こう一年、クセエかなア。
工藤 プロレタリアだ。
町子 ふふっ。
桐島 あ？
町子 このお茶は？ 貰っていい？
アヤ どうぞ。奥の部屋お使いください——んでも、無事帰れてよかったわ。
桐島 ア、アアア、アヤさん。（吃音）あんたは一年前とちつとも変わらんねえ。
アヤ そんなことないわよ。
巳喜雄 どこまで行つてた？
桐島 南の方だ。南の、ずっと遠い海だ。

アヤ、戸口を閉めに行き、中を窺っていた少女に気づく。

アヤ あの、どうぞ？

合羽を着たキミ、おどおどと入ってくる。

巳喜雄 泊まるんだべ？ （酒）やりながら話すべ。
桐島 おお——おお！

桐島、勝手知った振る舞いで宿帳に名前を書き、荷物を運ぶ。

キミ
すみません……、

アヤ
寒かったですよう？ はい、手拭い。

キミ
(首を振る)

アヤ
風邪引くよ？

キミ
でも、金がねえ……、

アヤ
いいのいいの、これは。貸すだけ。

アヤ、手拭いをキミに押しつける。

アヤ
上がった？ お茶コあるよ。

キミ
とんでもねえ。……土間の隅さ貸して貰えば……、

巳喜雄
……お茶コぐれえ飲め。ほんに風邪引くでば。

キミ、おずおずと手拭いを使い、土間に腰を下ろす。

巳喜雄
最終のお客はこれで全部だったか？

桐島
あと一人いたよなア？

町子
あれね、こーんなカバン持った……気味悪いヤツ。

巳喜雄
気味悪い？

町子
カバン抱いてさ、何かぶつぶつ言ってるの。あれ、多分アカよ。

キミ
そんな。坊様です。ずっとお経ば唱えてらした。

町子
アカだわ。覚員よ。あの鞆、爆弾が入ってるのよ。

工藤
いや、逆に特高かもしれない。帽子、やけに深く被ってたろ？

アヤ
その人、まだ汽車に？

桐島
さあ。なんせ海みてえな雨でなア。

大悟(声)
おーいっ！ 誰か！

アヤ
大ちゃんよ。

大悟(声)
手エ貸してけろー！

アヤ、出て行こうと。桐島、止める。

桐島
アヤさん、俺が。巳喜雄さん。

巳喜雄
あ？ おお……、

桐島 巳喜雄、雨の中に傘を差して出ていく。
アヤ、雨の奥を何があつたか透かし見ようとする。
工藤 立ち上がる。

町子 いいわよ、あんたは。
工藤 ……さっきの、ほんとに特高かね？
町子 それよりさ、ほら、中まで濡れちゃ……、

その時、遠くでドーンと大きな音。(峠に落石)

町子 (悲鳴) 何ッ?!
アヤ 峠の方……、
工藤 見てきます。
町子 あんた!

工藤、飛び出していく。

アヤ 大丈夫です。木でも倒れたんでしよう。お一人ともここにいてください。
アヤも行こうとするところ、巳喜雄、入ってくる。

巳喜雄 アヤ! 布団だ。

巳喜雄、戸を大きく開ける。
大悟と桐島、ぐったりした男を運び入れる。
アヤ、奥の座敷から布団を一組持つて来る。

アヤ どうしたの!
大悟 ベンチで倒れててよ。意識がねえんだ。
桐島 寝かせるぞ。

キミ、座敷の荷物などを脇に寄せ、アヤを手助けをする。
桐島と大悟、男を寝かせ、濡れた上着を脱がせる。

巳喜雄 おい——あんた! 大丈夫か?
町子 ちよつと……やだ……、
アヤ お義父さん、どいてください。お水、タライに。手拭いも。

アヤ、男のシャツのボタンなどを手早く外す。
巳喜雄とキミ、水桶から水などを用意する。

アヤ 凄い熱……。

男、ヒューヒューと荒い息を繰り返している。
工藤、男のスーツケースを持って入ってくる。

工藤 くそつ。重てえな。何入ってたんだよ！

アヤ それ、この人の荷物ですか？

工藤 ああ！

アヤ 薬！ 薬入ってませんか？

工藤と大悟、二人がかりでスーツケースを開けると、中には砂袋の
ような肥料の袋がいくつもはいつている。

大悟 なんだこれ?! 何運んでんだよ!

アヤ 薬は?

工藤 薬……薬……!!

肥料の他には大量の原稿用紙の束など。

工藤と大悟、焦りながら次々出していく、巾着を見つける。

工藤 これ!

巳喜雄、巾着を受け取り、座敷で中身を開ける。

ハンカチなどに混じり、ずしりと重い財布が転がる。

巳喜雄、財布の中を見る。厚みのある札束が入っている。

巳喜雄 ……お、

アヤ あった?

巳喜雄 いや、結構なお大臣だな。

アヤ 薬は?! ないの?!

大悟 これでねえか?! アヤさん!

大悟、土間に残ったスーツケースから薬を見つける。

アヤ、受け取ると、薬を確かめる。キミ、湯飲みを用意する。

アヤ しっかりしてください。あなたのお薬です。飲んで。——飲んで。

男、ヒューヒューと苦しそうな息をくり返し、目を覚まさない。

アヤ 死んでもいいの?! 飲んで!

アヤ、粉薬を開けると男の口に持って行く。

男に口移しで水を飲ませ、薬を与える。

アヤの行動に、その場の全員、目を惹きつけられる。

男、苦しそうに呻くが、徐々にその息が収まっていく。

アヤ (安堵し) ……、

町子 ——「宮澤賢治」。

町子、スーツケースから放られた原稿用紙の束を拾っている。

町子 書いてあるわよ。宮澤賢治って。その人の名前かしらね?

居合わせたそれぞれ、座敷に寝かされた男を見る。

外では風が一層強くなる。

二、メンタル・スケッチ ①

若い女が一人、歩いてくる。

女の名はトシ。手には、賢治の手紙。

トシ 『夜の湿気と風がさびしくいりまじり

松ややなぎの林はくろく

空には暗い葉の花びらがいっぱい

わたくしは神々の名を録したことから

はげしく寒く震えている

このままに死ねば、きっと、わたくしは地獄にしか行けず候』

賢治、起き上がろうとする。

だが、トシは去り、賢治、布団に崩れ落ちる。

三、峠②

二日目、七月三十一日の早朝。戸を震わす風の音。雨は続いている。座敷には賢治が寝かされている。

キミ、外から入ってくる。

木桶に井戸水を汲んできた。土間の水瓶に移す。

賢治が苦しそうに咳込んで寝返りを打つ。

キミ、水音を気にして残り静かに注ぎ入れる。

そつと座敷に上がると、賢治の布団を直してやる。

奥の座敷から、アヤ、盆を持って入ってくる。

盆には、奥の炊事場で作ってきた賢治の粥や握り飯など。

アヤ
おはよう。

キミ
(会釈)

アヤ、賢治の傍らに盆をおき、土間に降りる。
水を汲もうとし、水瓶が充たされているのに気づく。

アヤ
お水……、

キミ
……井戸から汲んどいたけど……いがったかね？

アヤ
助かる。

キミ
おれ、銭コがねえのに泊まってしまつて……、

アヤ
駅舎だもの。誰だつて居ていいの。ほんとはお布団で寝てほしかったけど。

キミ
(首を振る)

アヤ
ごはんは？

キミ
腹、減つてねえ。

アヤ
ゆうべも食べてないでしょう？

アヤ、座敷に上がり、お握りを上がり框に置く。

アヤ
良かったら。

キミ
(腹が鳴るが首を振る)

アヤ
釜石まで行くんでしょ？ 峠歩けないよ。男の足でも三時間は掛かるんだから。さ。

キミ
……いただきます。

キミ、握り飯を一口。

キミ

うんめ……、

キミ、夢中で食べ始める。それはキミにとって久しぶりの米。

アヤ

ゆっくり食べて。お茶コも淹れるから。

キミ

(何度も頭を下げる)

アヤ

名前は？

キミ

キミ。小畑キミ。

アヤ

よくね、あんたみたいな子が通るよ。大抵は行つたきり帰つてこない。

キミ

帰つてこねえつてことはさ、正敏さんの言ったことは本当なんだね。

アヤ

正敏さん？

キミ

おれんとこの、庄屋の坊ちゃん。

アヤ

その人がなんて言ったの？

キミ

向こうさ行つたら、たらふく食べるし布団で寝れる。悪ぐねえつて。

アヤ

そう。……でもキミちゃん、何するか、

キミ

なんでもねえよ。おかげで金も返せる。弟も助かる。万々歳だ。

賢治、咳込んで寝返りを打つ。キミ、ハツとして賢治を見る。

キミ

夜通し、咳してたね……。

アヤ

そうね。(布団を掛け直す)

キミ

熱くてすぐ剥いじまうんだ。

アヤ

見ててくれたの？

キミ

その人……、

アヤ

ん？

キミ

始発まで間があるね。今のうちに水もつと汲んじまおう。

キミ、水桶を持って、再び外に出ていこうと。

アヤ

大丈夫よ。

キミ

――、

アヤ

この人なら大丈夫。今朝は熱も下がってるみたいだし。

キミ

でも——でも、お父(と)さんもお母(か)さんも最期、そんな咳してた。

夜通し咳して、血イ吐いて……朝には冷たく硬くなって……、

町子、奥座敷から来る。

町子 (欠伸) おはよう。あー寝不足。(賢治に) うるさい。

キミ、水桶を持って外へ出て行く。

町子 ねえ、あつちに並んでんの食べていいの？

アヤ はい。……おはようございます、町子さん。

町子 ごはんと味噌汁だけ？ 一食十銭も取るくせに？

アヤ すいません。あとお香々、

町子 これじゃ浅草にいらるとの変わんないじゃない。田舎は食べものあんでしょ
う？

アヤ この辺じゃ……おととしと去年、二年続けて酷い寒さで。それに今年の春は
……、

町子 春が何？

アヤ すいません。お香々はお好きなだけ。

町子 つまんない。こんなら銀座でカレーライス食べてくるんだった。

工藤、起きてくる。

工藤 おはようございます。

アヤ 工藤さん、おはようございます。

町子 ねえ俊ちゃん、朝ごはんさ、

工藤 炊き立ての匂いで目が覚めました。久しぶりです。

町子、土間に降り、水瓶に柄杓を突っ込んで水を飲もうと。

アヤ、湯飲みを持って降りる。

アヤ (湯飲みを突き出す) 使ってください。

町子 (奪い取る)

工藤 (賢治の様子を見る) どうですかね？

アヤ 昨夜よりは。

工藤 薬を飲めたのがよかったですよ。女将の処置が良かった。並みの女じゃ、
ああはできません。

アヤ いえ……、

工藤 手慣れてましたね？

アヤ 昔、看護学校に。

工藤 へえ！

町子 ねえ、俊ちゃん。今日何時に出る？

工藤 峠を越えるんだ。雨が上がりるとき。——女将さん、あと一つ。
アヤ はい、
工藤 ちよつと垢抜けてるよね。この辺の人じゃないの？
アヤ 私は……嫁いできたんです。
工藤 やっぱり！前はどこ？
町子 いいじゃないのさ！女将のご亭主、渋みがあつて羨ましいい。
アヤ あれは義理の父です。
工藤 じゃ、旦那は？出かけてる？——イテッ。(町子がつねる)
町子 朝ごはん食べようツと。

外から巳喜雄・桐島・大悟の気配。

巳喜雄(声) とにかく、今、連絡する！

合羽を着た巳喜雄、飛び込んでくる。

アヤ お義父さん、
巳喜雄 峠で石が落ちた。土砂崩れだ。
アヤ 土砂崩れ——、
巳喜雄 尾根から崩れてきやがって、道は塞いじまった。この雨だば、まだ落ちるか
もしれない。
町子 ええ？
工藤 釜石へはどうすればいいですか。
巳喜雄 無理ですよ。引き返してもらうしかありません。
工藤 用があるんです。釜石の鉾山まで行かなきゃならない。
巳喜雄 鉾山？あんたが？——とにかく、鉄道の方さ連絡してきます。

桐島、大悟も戻ってくる。

アヤ あの、釜石には、大回りになりますけど、いったん便鉄で花巻に戻って、東
北本線で八戸まで行って、そこから海岸沿いを南下してくれば、
工藤 それ、今日中に行けますかね？
桐島 し・しし——しかたねえべ。自然が相手だ。
町子 峠の向こうの大橋駅まで行けば釜鉄に乗れるんでしょう？別の道は？
大悟 仙人峠で拓かれてるのはあの一本きりです。山ん中さ藪だらけでとても。
町子 あんた、運び屋って言ってたっけ？礼ならするわよ。
大悟 馬も通れねえし崖もあるし、道を外れちゃ、

町子 だらしないわね。今日中に行きたいのよ！
桐島 (大声) じゃ、見て来いよ！ しかたねえべ。

工藤、出ていく。

町子 あんた、

町子も追おうとするが、雨に戸外に出るのをためらう。
キミ、水桶を持って戻ってくる。

大悟 とにかく、あの土砂どかさねえと。

桐島 どかすったつてどうやるよ？ また崩れるかもしんねえぞ。

大悟 オヤッサンに聞くべ。こつたなこときつと鉱山じゃザラにあったべ？

町子 鉱山？

大悟 あん？ 釜石の鉱山だ。オヤッサン、若エ頃はあそこにいたつて。

町子 そうなの……。

大悟 ま、今日中の到着は諦める。花巻まで戻って大回りすりや、明後日にや着ぐ。

町子、傘を差して戸外に出ていく。

巳喜雄、奥の部屋から戻ってくる。

巳喜雄 軽便鉄道さ報告した。始発で人ば寄越してくれるとぞ。

アヤ そう。釜石の鉱山鉄道の方には？

巳喜雄 あつちも大橋駅から人ば出すと。こつちと両方から掛かればそんだけ早く片付くべ。

大悟 だば、雨上がるまでは待ちだな。

巳喜雄 んだ。だばメシ食うか。

大悟 んだ。

キミ あの！ どんぐらい待てば、

巳喜雄 まあ、こればかりはな、

キミ おれ、花巻に戻る銭コがねえ。ここで待つ銭コもねえ……。

全員 ……。

キミ 働きます。掃除でもなんでもする。だから待つてる間、メシだけ食わせてください。

桐島 おめえ、銭コ、まったくねえのか？

キミ 釜石までの片道切符と干し芋のかけら、そんで全部だ。

賢治、咳込み、寝返りを打つ。
桐島、自分の財布を探ろうとするが、巳喜雄、制する。

巳喜雄 んだば、このお人に借りたらいいんでねえか？

キミ え？

巳喜雄 どっちにしろ、いつまでもこうしとくわけにやいかねえだろ。家と連絡して

連れ帰ってもらわねば困る。おめえはこのお人の面倒は見る。

アヤ お義父さん、私が、

巳喜雄 おめえはうちのことがあるべ。——どうだ？ おめえがやるんだ。代わりに

金ば借りる。

キミ (頷く)

巳喜雄 よし。

巳喜雄、賢治の鞆を運んでくる。

アヤ ちよつと、勝手に、

巳喜雄 家の連絡先探さねば。それに宿代貰わねえと。

アヤ いいんでねえの、起きてからで。

巳喜雄 このまま死んじまったらどうする？

アヤ 死なないわよ！ ……死なない。あとで起こして薬飲ませます。

巳喜雄 また口移しでか？

アヤ |、

なににせよ、ここで死なれるのだけはご免だ。

そういやよ、ゆうべ気になったんだよな。(鞆から出し)——右灰！

桐島 なんでこつたなもん後生大事に詰めてんだア？

大悟 お、レコード。

桐島 お！

(読もうとするが) ……読めねえ！

おめえ馬鹿だべ？ 貸してみろ。——読めねえ！

桐島、大悟、笑う。

(レコード Richard Strauss 交響詩「死と変容」)

巳喜雄、鞆の内ポケットから手帳を見つける。挟まっていた名刺。

巳喜雄 「東北砕石工場 技師 宮澤賢治。岩手懸東磐井郡 陸中松川駅前」。

桐島 砕石工場？

巳喜雄 松川駅っていや大船渡線か。大船渡あたりさも鉱山が幾つかあったな。

大悟
じゃ、このお人も鉱山（ヤマ）さ潜ってんのか？ 見えねえ……。
巳喜雄
連絡してみるか。
町子（声）
だから！ 無理だったら！

工藤、入ってくる。そのあとを町子が追ってくる。

工藤
すいません。荷物、出して貰っていいですか。

町子
俊ちゃん！

工藤
小雨になつてきたんで、行ってみます。

アヤ
行くって——峠を？！

工藤
土砂も水吸つて固まつてますんで行けると思ふんですね。

大悟
危ねえぞ。まだ落ちてくる。

町子
そうよ、無理よ！ あたし行けない！

工藤
じゃ、来るな。……一人でも行きますんで。

巳喜雄
お客さん、焦ってるのは分かるがよ、地元の話は聞くもんだ。

工藤
忠告はありますがね、自己責任で行きますよ。女将、荷物は？

アヤ
——、

工藤
女将。

電話の音。

巳喜雄、舌打ちし、奥の部屋に行く。

町子
女将、あたしのも。……あたしも行く。

工藤
町子。あとで連絡する。

町子
だって、どうしたらいい？ 浅草へはもう戻れないし、約束したじゃない？

大悟
釜石の鉱山行って、ふたりで所帯持つって。

工藤
んだったら尚更——遠回りでも花巻さ戻って、

大悟
今日中に着かなきゃならないんですよ。なんとしても。命に替えても！

アヤ、工藤の荷物を持ってくる。無言で置く。

工藤
どうも。

町子
（あたしのは？）

アヤ
一人で行って。——立派なこと言つて、振りかざしても、

工藤
あ？

アヤ
命が自分のもんだと思つたら大間違いです。

工藤
大袈裟だな。子供じゃあるまいし。

アヤ ……救われたいです、
大悟 アヤさん、——アヤさん。
アヤ (必死で感情を抑えようと)
工藤 ……なんだよ……、
大悟 あんた、知らねえのか。春のこと。
工藤 春？
大悟 ……アヤさんはな、よだでご亭主亡くしてるんだ。
町子 よだって何？
アヤ ——津波だ。

ドーン……と峠で音。さらなる落石。全員、音の方角を見る。

町子 今の、
桐島 峠の方だ。
工藤 ——、
巳喜雄 また落石か？

巳喜雄、戻ってくる。(電話は軽便鉄道から)

巳喜雄 ……隣の足ヶ瀬駅でも早瀬川の堤が破れて、線路が水に浸かっちゃまったと。
今日のところは花巻と遠野間だけで折り返し運転にすると。
工藤 じゃあ、なんだ？ 戻ることもできない？
巳喜雄 なんだが。
工藤 畜生、……なんだよそれ……！！
巳喜雄 ……工藤さんつつったかね。生き延びて良か(えが)ったな。
工藤 ——、(巳喜雄を見る)
巳喜雄 さ、メシだメシ。こういう時はメシだ。
大悟 (笑う)へっ。
桐島 アヤ、お茶コ淹れてけろ。熱イの頼むわ。
アヤ 腹、減ったなあ。
(微笑む)味噌汁も温め直します。

巳喜雄・桐島・大悟・アヤ、次々に奥へと入っていく。
キミは賢治の傍で手拭いなどを絞っている。
工藤、土間の物を蹴る。

町子 ……、(工藤を見るが、座敷に上がり奥の部屋へ)

工藤 苛々と煙草を啜え火を点けようと。
賢治、咳込む。

工藤 (冷笑) ハ、

工藤、煙草を持って外に出ていく。
キミ、賢治の額の汗を拭う。賢治の手が伸び、キミの手を掴む。

キミ あ……、

賢治 ……トシ?

キミ 大丈夫? しっかりしてける。

賢治 (息を吐く)

キミ ——気持ちいいの? (汗を拭う)

賢治 夢コ、見えた……。

キミ ……どんな?

賢治 (首を振る) ……夢で良か(いが)ったあ……。

キミ 泣いでんの?

キミ、賢治の涙を拭ってやる。

キミ おめえさん、家はどこ? 帰らねえと。

賢治 ……帰る?

キミ 家さ帰るんだよ。

賢治 ……帰らねえ。……約束……、今夜、岩手山さ行くって……、

キミ 岩手山? 違うよ、ここは仙人峠だよオ。

賢治 嘉内さんさ待つてる……、

キミ え? 誰?

アヤ、奥座敷から出てくる。

アヤ キミちゃん、

キミ あの! あの! この人、起きたよ。

アヤ え!

キミ 目エ開けたよ、今——いがあったア……!

アヤ (枕元に座り様子を見る)

キミ 薬、飲まさねえと。

アヤ　ぬるま湯がいいわ。お湯、沸かしたから。
キミ　うん。

キミ、奥の座敷へ。
アヤ、仏壇に向かい、祈る。
やがて顔を上げ、賢治の布団を掛け直してやる。
雨が止んだのか、窓の外が仄明るくなっている。

アヤ　始発の時間だ。

アヤ、枕元の手拭いなどを持ち、奥の座敷へ去る。
——汽車の警笛。

賢治　……、(布団から手を伸ばし)

男が出てくる。男の名は保阪嘉内。

四、メンタル・スケッチ②

1917年(大正6年)7月の一夜。

岩手山への一泊旅行のリュックを背負った嘉内、賢治を起す。

嘉内　賢さん、いつまで寝てる？

(ガバッと起きる)

岩手山に行くんだろ？(ふと気づき、賢治に手を伸ばす)

あ?!

草、ついてんぞ。

嘉内、賢治の髪や服についた草を取る。

賢治　……嘉内さん。(じっと嘉内を見る)

なんだよ?

いいや。……、(笑う)

(賢治のリュックを渡す)遅れて悪かった。行こう。

日本女子大学の寮内にいるトシ、賢治からの手紙を読む。

トシ　(手紙)「道が悪いので野原を歩く。野原の中の黒い水たまりに踏み込んだ。」

賢治 今から歩いて、夜明け前には七合目、日の出の頃には頂上だ。

嘉内 そういや自慢の妹さんはどうした？

賢治 結局、夏休みさなるまで帰れねえど。今は東京の日本女子大の寮だ。

嘉内 なんだ。つまらん。美人か？

賢治 ……かしこいな。

嘉内 会いたかったな。

賢治 週に一遍手紙ばかり取りしてる。君のことも書く。

嘉内 なんて。

賢治 保阪嘉内。盛岡高等農林に突如現れた全能の神アグニ。

嘉内 ほう？

賢治 クリスチャン。ニヒリズムの皇帝。冷たいエゴイスト。

嘉内 ほう？

賢治 入学してたった三月（みつき）で俺を変えた、ひとりの友。

トシ （手紙）「やがて、月が頭上に出て、月見草がほのかに香る。水たまりにも象牙細工の月が映り、どこかで小さな羽虫が震う。」

賢治 牧場を越えたら登山道だ。

嘉内 ああ。いい気持ちだ。——「柳沢のはじめに來れば真つ白の 銀河が流れ星が輝く」。

賢治 「松明がたうたう消えてわれら二人 牧場の土手のうへに登れり」。

トシ 「今日こそ飛んであの雲を踏め」！

三人笑い合う。手紙の枠を越え、トシも仲間に加わっている。

嘉内 『完全に己を捨て去り、他のために生きる人生こそ永遠のものとなる』。

トシ 誰の言葉だ？

トシ トルストイ。

賢治 ……トルストイ！

嘉内 そう。彼が書いている。農村へ行こう。自分を犠牲にしよう。

賢治 君は、そのために農林学校さ来たのか？

嘉内 賢さんは違うのか？

賢治 ……、

トシ 二月のロシアの革命で、ついに労働者が皇帝を引き摺り下ろした。ロマノフ朝の帝政ロシアが終焉を迎えた。農奴は解放され、農村に真の自由が来る。トルストイが書いたとおりの、真に人間らしい農村が生まれるんだよ。20世紀は人間の世紀になる。

トシ 大学で成瀬校長も同じことを仰ってます。20世紀は銃声とともに幕を開けた。けれど、国際の利害や政策の上にあっては、ほんとうの平和は訪れない。

嘉内

あらゆる信仰の根本にある宇宙の意志に自分を捧げていく必要がある。

賢さんはどう思う？

トシ

兄さんは？

賢治

——うん。うんうん……うん。

嘉内・トシ

……。

賢治

俺は、……現実には、真つ青な——青い人たちが長え長え手ば伸ばして、前に流れる人の足ば掴み、髪の毛ばひっ掴んで、その人を溺れさせては自分だけ前に進む世界だと思ふ。ある者は怒り、ある者は妬み、互いに殺し合う。……こつたな暗い世界が少しでも良くなるなら……そのためなら俺は……死んでもいい、

嘉内・トシ

(頷く)

賢治

死んでもいい。

嘉内

ああ。

賢治

(嬉しさが込み上げ)——赤い岩だ！ 七合目だ。休んで行くべ。

トシ

(手紙)「冷たく赤い岩に腰を下ろし、空を見れば、琥珀色の空間に中世のオオトカゲが浮かび立つ。白い空に灼熱の火花！」

嘉内

風が強いな。

賢治

ああ。

空を見ていた三人、同時に声を上げる。

賢治・嘉内・トシ

あ！

賢治

見だが？

トシ

見だ。星が流れた。

嘉内

銀河の汽車だ。

賢治・トシ

(嘉内を見る)

嘉内

甲府に帰るときに見る中央線があんな感じだ。闇の中、光が走る。

賢治

銀河の汽車かあ……！——(しりとりに)汽車はシグナルの中さ行く。

嘉内

空間の第四方向。

トシ

ヴァイオリン・ソナタ。

嘉内

たちどころに速度を上げる。

トシ

瑠璃の空。

嘉内

ラピスラズリ。

賢治

リングネビュラ——環状星雲！

トシ

ねえ兄さん、まことの道はどこにあるの？

賢治

まことの道……、

嘉内

百姓のキングダム。パラダイスを作れ。

賢治

それが、道が？

嘉内

トルストイならそう言うぞ？

トシ

ソクラテスも？ コペルニクスも？

嘉内

——雲が晴れた。

トシ

ターコイズ。

賢治

スバルの鎖。

トシ

輪廻の輪。

嘉内

藁靴はいた農民のように。

賢治

ニルヴァーナ。

トシ

名も知らぬ星。

賢治

し・し——真理。

嘉内

何だ？

賢治

（火が消え）松明。

消えた松明、その熾を賢治と嘉内で吹く。

小さな炎が生まれ、その火を二人で育てていく。

賢治

そうだ。俺たちは一生、真理を求めて生きようでねえが？

嘉内

で、真理とは？

賢治

すべてのひとが、今ここで、救われる道。妙法の道（みち）。

嘉内・トシ

妙法……、

賢治

妙法蓮華経。嘉内さんのキリスト教も、うちの家の浄土真宗も、突きつめればみんな宇宙に至る。トシの学校の校長先生の言うとおりに、あらゆる宗教の

源は同じ、宇宙の意志だ。その意志は文字にしたのが、妙法蓮華経だ。法華経さば宇宙がちやあんと説かれてる。

（味わうように）妙法蓮華経。南無、妙法蓮華経……。

浄土真宗やキリストのように、来世や天国での幸福を願うものでねえ。法華経は、生きているこの身体、今このまんまで、衆生まるごと救う道。救われる道だ。

ずいぶん、信じてるんだな。

ああ。二人とも俺と——俺と行かねが？ まことの道を。

……まことの道は、辿りたいと思うよ。

じゃあ、

法華経に帰依するのは、まだちよつと待ってくれ。

……早えほうがいいんだけど……、

自分でも読んでみてからじゃないとな。

そこはほら、入っでからでも、

賢治

嘉内

賢治

嘉内

賢治

嘉内

賢治

嘉内

賢治

トシ

嘉内

そういうわけにはさ。な？

賢治

でも俺は……、嘉内さんが来てくれるんなら俺は――、

嘉内

ん？

賢治

どこまでも行ける……、

嘉内

(笑う) なんだよ。自分のためか！

賢治

そういうことでねえ。そつたなわけねえ！

トシ

夜が明けるよ。紫水晶(アメシスト)の色空だア。

嘉内

ま、でも、……俺も人のために生きるよ。

賢治

まことの道を？

嘉内

ああ。

賢治

嘉内さん。今ここで誓ってくれねが？ 言葉にしてける。俺と、その道を共

嘉内

に歩く。人を救う旅をするぞ。

嘉内

分かった。まことの道を――人のための道を生きる。そのためならこの身体、

百遍死んでも構わない。……これでいいか、賢さん？

賢治

(叫ぶ)

嘉内・トシ

！

賢治

……南無……妙法蓮華経……！

トシ

(賢治を見て笑い) ……南無妙法蓮華経。

五、峠③

賢治

アヤ、仏壇で鈴を鳴らす。

賢治

二日目の午後四時近く。雨はようやく上がった。

賢治

鈴の音で、賢治、目を開ける。

賢治

(天井や周りをぼんやりと) ……、

賢治

外から復旧作業に出る気配。

大悟(声)

モッコなら裏の納屋さあんど。

桐島(声)

シヤベルも持ってげ！

町子(声)

なんであたしが！

キミ(声)

おれが持ちます……、

賢治

大悟・桐島・町子・キミ、作業へ向かっている。

賢治

……ここは……、

アヤ

具合どう？(賢治の額に手を)――うん、

賢治 ……あの……？

アヤ 分かる？ 仙人峠の駅舎だよ。おめさん、軽便鉄道で倒れたんだよ。

賢治 ？ ……ああ……、

アヤ 酷い熱だったよ。咳もやまなくて。

賢治 どれぐらい……、(咳)

アヤ ゆうべからずつと意識ねがったよ。今は七月三二日の夕方。

賢治 ……、(起きようとして)

アヤ 無理しないで。

賢治 (布団に崩れ、咳き込む)

アヤ (再び布団を掛けてやり) ……宮澤賢治さん、ですね？

賢治 俺を……？

アヤ 薬を探すのに、荷物、見させて貰って……。

賢治 ああ……、

アヤ 今、名刺にあった会社に連絡しています。

賢治 連絡？

アヤ 迎えに来てもらわないと、

賢治 ……やめてください。連絡は、

アヤ ——もし会社に言うのがあれだったら、お家の方に、

賢治 やめてください！ そいつは絶対……、

アヤ ……、

賢治 おもさげね。大丈夫です。……大丈夫ですから……、

アヤ (どこが？ 宮澤さん、普通の風邪じゃないでしょう？ ゆうべは怖かったよ。

賢治 もしかすつとこのまま……、

アヤ ……、

賢治 とにかく心配しないで任せてください。こんな山奥、お医者もないもの。

賢治 (アヤの手を掴む)

アヤ ——何、

賢治 (咳き込みつつも起きようとして)

アヤ ちよつ……分がったから無理は、

賢治 か……厠(かわや)、

アヤ え？

賢治 (訴え) ——、

アヤ 厠！ ああ……、

アヤ、タライを持って来る。

アヤ はい。

賢治 — あ？

アヤ あとで洗うから。

賢治 いやいや……、(起きようとするが力が入らない)

アヤ 恥ずかしいことないです。

賢治 あ——あなた、どなたです？

アヤ 夏井アヤ。この駅舎のものです。ここに来る前は仙台の病院に勤めてたん

です。だから気兼ねしないで？(タライを布団の中に入れ)

賢治 ひえっ……、

アヤ さ。……手伝う？

賢治 ……うッ……うう……うう……ッ、

賢治 工藤、奥の座敷から鞆を持って出てくる。

賢治 あんだ、後生です……ッ！

工藤 え？

賢治 か……廁へ……ッ、

工藤 あ？！ お、おお……、

工藤、鞆を置くと賢治の傍へ。

工藤 (賢治を支え) 起きるぞ。いいか？ ——歩けるか？

賢治 う……うう……う……、

工藤 座敷の奥だ。……がんばれ。

賢治 (何度も頷き) ——、

工藤、賢治を支えながら、奥の座敷へ入っていく。

巳喜雄、奥の座敷から軽便鉄道の冊子を持って入ってくる。

巳喜雄 ——起きたのか。

アヤ はい、今。

巳喜雄 会社、やつどつかまった。んだども人手不足で迎えば出せねえと。電話さ出たのも社長ですよ。

アヤ そう。

巳喜雄 代わりに、家が花巻だそうで、そっちさ知らせてくれど。その家つつうのがよ、

アヤ 何？

巳喜雄 いや、大変な家らしくですよ、宮澤っていえば花巻じゃ子供でも知ってる。知

らんもんはねえ家だと。花巻銀行だべ温泉だべ、便鉄も(冊子を捲り)——
これでねえか? ほらここ、軽便鉄道設立、株主 宮澤義治。
宮澤……、

巳喜雄 この人の一族だねが? えれえことだねえか。こいづはビツと電話しねば。
お義父さん。あの人、うちさ知らせたくねえつて。

アヤ ああ?

アヤ 電話しねえでつて。

巳喜雄 馬鹿言つてんでね。死にかけてだでねが?

アヤ うん……、

巳喜雄 どうなんだ、こういうとき。病院だば患者の言うこと聞くのが?

アヤ ……いえ。でも理由は聞くと思います。なんで知らせたくないのか。もし本
当に、連絡して悪いことがあつたら、

巳喜雄 悪イことなんてあるわけねえべ? こつたな煎餅布団で寝てるより羽布団
で寝る方がなんぼかいんだが。それに、万が一何かあつてみる。俺は、ま
たあつたな思ひするのは、——邦彦の二の舞だけは、ご免だ。

アヤ ……そうね。(大きく息を吐き) ……連絡ばしましょう。

巳喜雄 なんなら俺が花巻さ送つてぐ。そだな、間違いがあつちやなんね。

アヤ はい。

賢治(声) そんなら復旧は……、

工藤(声) 今日明日は無理だろ——さつきようやく雨が上がったんでね……、

工藤、賢治を連れて戻ってくる。よろめく賢治。

巳喜雄 危ねえ!

賢治 すいません。

巳喜雄と工藤、二人で賢治を支えて布団に寝かせる。

賢治 ——ありがとうございました。工藤さん——と、

工藤 ここのご主人だ。

巳喜雄 仙人峠駅舎兼旅籠、あるじの夏井巳喜雄と申します。

賢治 宮澤です。この度は申し訳ねえす。ご迷惑を……、

巳喜雄 ご迷惑なんて。アヤ、

アヤ はい。

巳喜雄 お薬は差し上げていいのが? お茶コは?

アヤ 白湯、お持ちしましょうか?

賢治 すいません。

工藤 俺はこれで出ます。電話貸してもらえませんか？
出るって？

工藤 おいとまします。花巻に戻って、八戸経由で釜石に向かいます。
でも汽車が、

工藤 遠野からは折り返し運転してるんでしょ？ 遠野まで線路伝いに歩いてみますよ。

巳喜雄 言ったべ？ 線路、水没してんだべや。

工藤 行ってみますよ。ちよつとぐらい足が濡れようが。今日中に遠野駅まで行ければ、明日の始発で花巻に向かえる。釜石に着くのもそれだけ早くなる。

巳喜雄 (息を吐く)

アヤ 町子さんは？ 呼んできます。

工藤 いいですよ。(腕時計) ……三時になる。電話貸してもらませんか？

巳喜雄 ……あんだは。……所持持つって約束した女でしょう？

工藤 持ちますよ。そのためにも行かなきゃならない。(電話に行こうと)

巳喜雄 こここの電話さ客に貸すもんでねえ。

工藤 (金を出し) これでいいですか？

巳喜雄 待で。あんだは後だ。

工藤 後？

巳喜雄 こちらのの方が先だ。家さ電話してもらわねば。

賢治 俺は……、

工藤 急いでるんです。三時に電話をしなけりゃならない。

巳喜雄 こつちも急ぎだア。命掛かってんだ。

工藤、金を置くと勝手に奥の座敷に立っていく。

アヤ 工藤さん、

巳喜雄 ……。

……あの俺は……、(咳き込む)連絡はしません。

アヤ なんで？ 心配なさるでしょう？

賢治 行くところがあるんです。家さ戻つちまえば、二度と出してもらえね……。

巳喜雄 賢治さんでしたか。おめさん、そつだに体弱つて、一人じゃ歩くこともでき

ね。無理しても、命縮めるだけでしょう？ 家さ戻つて、

それでいい。——それでもいい。行きたいんです。

アヤ・巳喜雄 ……、

巳喜雄 迷惑です。おめさんさ何かあったら責められるのはこつちだ。

賢治 責められる？

巳喜雄 俺たちだけでね。もしかすつと、軽便鉄道のお偉いさんも、

賢治 なしてそつだな話さなるんです？

巳喜雄 宮澤義治さん。ご親戚ですか？

賢治 祖父ですが……。

巳喜雄 ほう。お孫さんですか。ひよつとしたら他にも、ご親族が何人も鉄道本社さ
お勤めでしょうか？

賢治 あ、俺は……！ (咳き込む)

巳喜雄 (いい、いい)

賢治 聞いてくれ。俺は、そんなんじゃねえです。そんなんじゃねえ。家のことは
俺とは関係ねえ。……勘当、そう、とつくに勘当ばされてる。

巳喜雄 家さ戻つたら出して貰えねえんでしょう？ 箱入りでねえですか？

賢治 ……ッ、

アヤ ———どこへ行きたいんです？

巳喜雄

アヤ

賢治 ……畑ば見に……、

アヤ ……畑？

賢治 釜石に農学校の教え子が住んでおります。春のよだで畑が海水かぶつち
まつて……手紙ばくれました。先生、助けでと書いてありました。行かねば
なりません。この目で土さ触つて、肥料の設計ば、
肥料つて……あんだがするこつでねえでしょう？

巳喜雄

賢治 何が分かるんです！ あんださ何が分かる。俺は家ば憎んでいます。ずつと

憎んでる。……家は汚え金貸しです。凍つた暖簾、薄暗い質草、垢がついて
ひやりとする子供の着物——農民の血と汗ば刈り取つて栄えできた家。俺は
父親ば憎みます。俺は……俺だけは……、

巳喜雄

……金に、綺麗も汚えもねえでしょう。働ぐ。商う。儲ける。遣う。なんも
汚えことねえ。——俺はな、若え頃は釜石の鉱山さいたんだ。事故で火傷し
て、スズメの涙より少ねえ見舞金ば貰つた。それでも息子と二人、働いで働
いで、働いだ。息子が軽便鉄道の機関士さなつて、アヤが嫁いできて、よう
やくごさ落ち着いたんだ。んで、金ば出し合つて、軽便鉄道の株ば買った。
たつた一口、そんだけだげんど。その株は夢だ。こつたな険しい仙人峠さい
つか線路が通る。花巻から釜石まで一直線に汽車が走る。鉄道が、暗い峠ば
明るくする。

岩手軽便鉄道の資料を置く。

巳喜雄

賢治

金を儲ければ世の中さ遣うごどもできる。べつが悪い。

巳喜雄

それに……父親のごとく、そつだなふうに言うもんでねえ。

工藤、奥の座敷から来る。

工藤

ありがとうございます。

アヤ

工藤さん、

工藤

(鞆を掴む)

アヤ

行くの？

工藤

ええ。鉱山で死人が出たそうで。埋め合わせに早く来いと。

巳喜雄

死人なんてザラだがな。あんた、何しに行く？ 鉱山なんてここはな、浮き足だっっていくような場所だ。行きたくなえのをやり込めて闇の中さ潜って、この世の地獄だ。……あんた、何だ？

工藤

(笑う)……東京じゃずっと仕事にあぶれてましたからね。やっと働ける。お世話になりました。

アヤ

ねえ、待って、町子さんに、

工藤

あとで連絡しますよ。

工藤、出て行く。

巳喜雄

あいづ、アカだべ。

アヤ

共産黨員？

巳喜雄

近頃、鉱山の中さも労働争議の嵐が吹いてる。取り締まりが見せしめに何人も殺したぞ。いつだって割を食うのは俺だちだ。

賢治

——、(布団に沈み込む)

アヤ

葉、飲みましょうか。

巳喜雄

……峠の様子ば見てくる。

アヤ

はい。

そのお人のことはおめえさ任せる。——(賢治へ)ここさいるのは構いませんが、宿代は貰いますよ。看護付きですから倍はいただきます。

巳喜雄、出て行く。

アヤ

……葉飲んだら、眠った方がいいわ。大丈夫。勝手に連絡はしません。

アヤ、奥の座敷へ出て行く。

賢治

……、(顔を覆い)

外からキミと町子が戻ってくる気配。

キミ(声)

(巳喜雄に) お疲れさまです。

巳喜雄(声)

交替だ。お茶コ飲んで。

キミ(声)

はい。

キミと町子、泥まみれになって帰ってくる。

キミ

お疲れさまです。戻りました。

アヤ(声)

キミちゃん？

キミ

晩飯の手伝いさしますよ。

アヤ(声)

ありがとう。

町子

——あーもう……、

キミ

ほら、町子さん。手エ洗って。

町子

あああもう……、

キミと町子、泥だらけの服をなんとかしようとして、
疲れて一歩も動けない町子をキミが世話を焼く。

キミ、賢治が起きているのに気づく。

キミ

あれっ！ おめさん、起きてるね。

賢治

……ああ……皆さんに世話掛けちまって、

キミ

キミだあ。朝もお喋りしたんだよオ？

町子

——ったく、あいっつってばほんと……！！

(奥に) ちょっと俊ちゃん、工藤

賢治

俊作！ 女に働かせて何してんのよ！ もう！

町子

その人なら、行きました。

賢治

は？

賢治

工藤つつう人なら……もう……、

町子、勢いよく座敷に上がる。ずかずかと奥の座敷へ。

アヤ(声)

(ぶつかりそうになり)

アヤ、白湯を盆に載せて出てくる。賢治の枕元に。

町子、ずかずかと戻ってくる。

町子 ———いつ。

アヤ さつき。線路伝いに遠野まで歩いてみるって。あとで町子さんに連絡するって……。

町子 へえ……、

町子、煙草に火を点けようとする。だが手が震えて点かない。

町子 (煙草に当たり) ……ッ、

町子、外へ出て行く。

キミ 町子さん！

アヤ キミちゃん。(止め) ———夕飯の支度、手伝ってくれない？

キミ ……はい。

アヤ、奥の座敷へ。

キミも続こうとし、座敷に上がる前になお泥を気にする。

キミ (泥をはたき) ……そういや、おめさま？

賢治 うん？

キミ おめさまの鞆、砂袋でいっぱいだったね？

賢治 ああ……、

キミ なんてあんなの運んできたの？

賢治 炭酸石灰だ。

キミ タンサン……？

賢治 肥料だよ。作物をうんと育てるにはまず土だ。土ば改良する肥料だよ。

キミ なんでそつだなこと知ってるの？ おめさま、先生さま？

賢治 いや……まあ、教えてたこともあったけど……、

キミ ふうん。そつだな人がいてくれてたら、お父さんもお母さんも死なねえで済んだかなあ……。

賢治 ———、

賢治 キミちゃん、

アヤ (声)

キミ はア！ ———飯、待っててね。

キミ、奥の座敷に入っていく。

賢治 ……、

賢治、顔を覆う。飽き足らず、逃れるように布団をたくし上げる。

六、メンタル・スケッチ③

嘉内、木製の丸椅子を運んでくる。

丸椅子を置いた場所、それは広場——羅須地人協会となる。

嘉内

『農民芸術概論。序論。われらはいっしょに何を論ずるか?』

賢治、椅子の元へ。

賢治

……そうですね……まずはこれ、椅子について。丸くて、四つ足で、木で出来てる。座ってみると、背筋が伸びて、具合がいい。背もたれもねえからどっからでも座れる。名前もねえから誰でも座れる。んだ、誰でも来て、好きなとき座っていいんだ。こういう椅子が五個か六個か、したらここが——広場になる。集まってみませんか? 農民はずいぶん忙しく仕事も辛い。この灰色の労働を乗り切る道は芸術です。農民芸術。風とゆききし、雲からエネルギーをとれ。なべての悩みを薪と燃やし、なべての心を心とせよ。

嘉内

『農民芸術への批評。』

賢治

……もちろん、仕事のことも話しましょう。この稲ば育ててみたらどうかね? 陸羽一三三号。寒さに強く虫にも強い。肥料は……ま、ほかの稲より、ちつとばかり化学肥料を多く入れた方がいいけれど……んでもね、うまく実ればよ、肥料代はたいしたことねえよ。それに、いつかこの星に住まう人が今の何倍も……(笑う) 百億人になったときに、飢え死にから救うのがこつだな作物だ。肥料の設計は俺がすつから、試しに植えてみねが? 俺たちが農民がこの星の未来は救うんだでば。

嘉内

『結論。われらに要るものは……、』

賢治の父、政次郎(巳喜雄) 来る。

賢治

お父さん、

政次郎

爺さまの別荘は遣うのは構わねえけど、何してんのす? まさがおめえ、法華経だけでねぐ、アカさもかぶれたんでねえが?

賢治

違う! アカなんて。俺たちは党員なんかでねえ。俺たちは農民としてもつ

ど別の、

政次郎

俺だち俺だちって……誰が農民だ？ こつだな忙しい時期に皆さん集めて、迷惑かけんでねえ。

賢治

……迷惑？

政次郎

ほどほどにしとげ。

巳喜雄（政次郎） 丸椅子を倒す。去る。

嘉内と賢治、倒れた丸椅子を見る。

嘉内

『われらに要るものは、銀河を包む透明な意志 巨きな力と熱である。』

賢治

……嘉内さん。会えませんか。俺の手紙、届いてませんか？ 届いていたら一言でいい、返事ばくれませんか？ 軍隊帰りでお疲れのあなたに、なにも面倒ば掛けようっていうのじゃありません。ただ一言、あなたの心が欲しい。俺と行くと。あの夏の岩手山で誓ったとおおり、二人で行くと言って貰いてえのす。今すぐここへ来て、俺と、まことの道を……、

嘉内、倒れた椅子を持って去る。

賢治

嘉内さん！ トシ！ われらに要るものは、銀河を包む透明な意志 巨きな力と熱である！ ……会いてえよ。返事してけれ……！ 南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……！

七、峠④／メンタル・スケッチ④

二日目の深夜。丼碗に打ち付けられるサイコロの音。

桐島・大悟の声を潜ませた笑い声。

二人、コップ酒を飲みながら賭博に興じている。

賢治、布団の上に取り上げて、鞆を引き寄せる。

鞆の中から原稿用紙と鉛筆等を取り出す。

時折、咳き込む。夜になり、熱はまた上がってきている。

奥の座敷では、巳喜雄とキミは就寝している。

大悟

ヒフミかよ！

桐島

（爆笑しかけ）

大悟

馬鹿ッ、しーっしーっ！ 巳喜雄さん起きちまうへ。

桐島

んだども、おめえ面白えな。借金取りかえそろうとして、よげい借金ばこさえてるでねが。

大悟 次だ次。——あ、(掛け金を探すがない)
桐島 マグロ船に乗ってねぐで、えがったなあ？ こんだけ弱エと三日も経たねで

大悟 フカのエサだあ。

大悟 宮澤さん。賢治さん。

賢治 ——はい？

大悟 金ば払って貰ってねがったな？

賢治 あ？

大悟 あんだ、ホームで倒れてたべ？ ホームからここまで運んでやったのは俺だ。

賢治 運び屋が運び屋の仕事ばしたんだ。払ってけれ。

大悟 おめさんが。それは。ありがとうございました。この御恩……、

大悟 ああああ、いい、いい。それはいい。運び賃。な？ 三円。

賢治 花巻からここまでの運賃が一円七〇銭だども、

大悟 命の代金だよ。安いべ？

賢治 ……はあ、

奥の座敷から町子出てくる。

賢治、金を出し、大悟が奪うように掴む。

町子、その様子を横目で見ながら、湯飲みを酒を注ぐ。

大悟 おっしや。次は五ゾロば五倍、ピンゾロば十倍でどうだ？

桐島 途端に。パイ。パイ吠えやがる。

大悟 次こそは絶対勝つ。次で全部取り返す。

桐島 おめえ最低だべ。

大悟 最低とが言うな。

桐島 んだば次負けたらおめえの馬さ貰うな？

大悟 えっ？！ は……、

桐島 五ゾロば五倍、ピンゾロば十だな？ ついでに他のゾロ目なら三倍だ。

大悟 ちよっ……えっ……？ 馬はよ……桐やん商売道具だでは……、

桐島 命(たま) 賭ける覚悟もねぐサイコロ振るな？

大悟 おめえ酒飲むと人変わるな？ よ——よし。

大悟、サイコロを振る前に本気の祈りを込める。

掛け声と共に振る。サイコロが振り入れられる。

町子、丼碗を蹴る。

桐島・大悟

町子 ——うるさい。

桐島 このアマ……！ 男がサイコロ振り入れたら、
町子 臭（クサ）——酒クツサ！
桐島 誰が臭エだ！（大声）し——しかたねえべ！ 一年も魚のハラワタさ塗（ま
み）れでんだ！ 誰だつてごうなる！ 臭エが悪イが！？
町子 ひっ、
大悟 ちよちよちよ——桐やん、落ちつけ？！
賢治 飲み過ぎです、今、水ば……、（咳き込む）

アヤ、奥の座敷から出てくる。繕い物の途中。

アヤ なんの騒ぎ！ お義父さんもキミちゃんも寝てるのに。
大悟 すいません。

桐島 アヤ 桐島さん。病人もいるのに。
……アヤさ……、

桐島、途端に気弱になり、聞こえないほどの声で謝る。

町子 なによ。聞こえない。
桐島 ……、
町子 ふん。
アヤ さ、明日も土砂どけなきやなんないもの。寝ましょ。

アヤ、繕い物を終え、糸を切る。

アヤ 宮澤さん、熱は？（手を当てようと）
賢治 （拒絶）いいです。
アヤ いいから。触らせて？（手を額と首筋に当てる）——あれ、高いね？
賢治 ……その、
アヤ 夜になってまた出てきたね。手拭い、冷やしてこようが？

アヤが立ち上がるころ、桐島が掴まえる。

その手には、アヤが縫い終えたものを縫るように持っている。

アヤ 桐島さん？
大悟 どうした、桐やん。
桐島 ……アアア……アヤさん……俺は……ああ謝らねえど……、
アヤ もういいわよ。静かに寝てくれれば。

桐島 違う。……去年、俺がマグロ船さ乗りに銚子に行く時——ここを通ったとき、

アヤ アヤさん、俺のボダンば……付け直してくれで……。

桐島 そうだった？

俺……母親以外の女にそつたなこしらうの初めてで……なんづつだ

らしいが……、

アヤ

気にしないで。たいしたごどねえよ？

桐島 ……俺……船さ乗つてからも……あんだのごど思い出しでだ。……何日も何

日も暗い波に揺られで、女が欲しくで欲しくで狂いそうになるど……あああ

あんだのごどば、思い浮かべて……、

大悟

桐やん！ おめえ何言い出すんだべ、

桐島

悪イ、悪イって思いながら俺……、

寝よう？ な？ もう寝るべ！

桐島 それだけじゃねえべ……ゆうべ……邦彦さんさ亡くなつたで聞いた時……

……俺ア……よがっだつて……思つちまつて……これであんたが独り身さな

つたつて……。……おもさげね……おもさげね……、(寝る)

大悟

おい、桐やん？ ……寝でる。しようもね……。

アヤ

昼間、めいっばい働いでくれたもんね……。

大悟

……。(咳き込む)

大ちゃん、布団連れてつてあげて。

アヤ

わがってる。このオッサン、明日絶対覚えてねえだろうな。——オラ、重て

大悟

えな、クソ。——まあ……アヤさん、

アヤ

ん？

俺も酔つてつから言うけどよ……。死んだ人はさ、帰つてこねえよ。

……、

今じゃねえよ。もちろん今でなくてさ……んだども、あんだは元々この人

アヤ

じゃねえんだ。

大悟

……、

アヤ

お休み。

アヤ

お休みなさい。

大悟

桐島を抱えて奥の座敷へ出て行く。

アヤ

アヤ、ふと賢治の傍らに座る。

アヤ

町子、煙草を取り出し、吸いに外へ出て行く。

賢治

……、

……忘れられませんよ。いなくなつてねえんですから。ただちつと、俺たち

から見えねくなつただけで……、

アヤ ……宮澤さん？

賢治 別のやり方さ必要になっただけです。たとえば、普通は紙の裏側を書いてある文字は読めません。でももしここに油コニ滴垂らしたらどうです？ あん

だ、繋がる瞬間が。世界が透き通る瞬間が。

(微笑み) え？

賢治 ……なんでもねえです。……すいません。

アヤ 宮澤さんもどなたか？

賢治 妹を。

アヤ よだで？

賢治 もっと前。もう一〇年になりますか。妹はまだ二四でした。

アヤ お若かったのね。

賢治 ええ。早すぎだ。あんまりにも。……あいつは俺よりよっぽどかしくくて、

気立ても良くて、(咳き込む)

アヤ、賢治の布団を掛け直す。

アヤ ……夫は、遺体が見つかってないの。だからいつまでもね、……今も生きて

て、なんかの拍子で帰ってくる。ふいに戸が開いてたごいまって、

外で物音。アヤ・賢治、ハッと外を見る。

町子、慌てて逃げてくる。

アヤ 町子さん、どうしました？

町子 いたの。そ……その茂み……！ なんかいた……！

賢治 なんか？

町子 熊よ！ 熊！ 熊だわ！

アヤ／賢治 タヌキでしょ。／タヌキだべ。

アヤ・賢治、ふと力が抜ける。笑う。

町子 違っ、大つきかったもの、見えなかったけどワサワサって——なによ！

……寝ましようか。

町子 ちよっと！ ほんとだったら！

アヤ タヌキじゃなかったらイノシシ。雨でここまで降りて来たんでしよう。

賢治 熊はもっと山ん中だべ。

町子 ここだって山ん中じゃないのよ！

アヤ 熊は人を怖がってますから駅舎には降りて来ません。隣駅の足ヶ瀬まで行け

町子
ば熊撃ちの名人もいるし。心配ありません。
でも……、煩いのよ、ここ。昼間は気になんなかったのに、夜になったらい
ろんな音がして……、

山を抜ける風のざわめきが強くなる。

アヤ
風が出てきたわ。

アヤ、賢治の手拭いを濡らして絞る。賢治の額に。

賢治
——俺、妹が亡くなった後、あいつば探して、北の果ての終着駅、樺太庁の

栄浜まで行きました。

樺太？

(賢治を見る)

賢治
あいつが白い鳥になった夢を見て。こったな風の中、宗谷海峡は渡りました。
アヤ
うん。空を見ても海を見ても見つからなかったら、地面の果てまで探しに行
くしかないもの。

町子
くだらない。……出てった人探すのもくだらないのに、死んだ人なんて。な
にそれ。夢の話？

アヤ
町子さん、

……寝る。熊ほんとに平気ね？

アヤ
町子
工藤さんなら、大丈夫です。夏だし、足ヶ瀬には村もありますし。
そんなこと聞いてないでしょ。(コップ酒を手に、奥の座敷へ)

寝間着姿のトシ、出てくる。町子とすれ違う。

賢治
あ、

アヤ、仏壇に向かい手を合わせる。最後に小さく鈴。

アヤ
私もこれで。宮澤さん、眠れなくても目閉じて。

賢治
……アヤさん、それ……壺、何に祈ってるんです？

アヤ
なんでもない。……まじないっていうのかな。

賢治
まじない？

アヤ
もう一度会えますように。

賢治
……南無妙法蓮華経。南無妙法蓮華経。南無妙法蓮華経……。

アヤ
宮澤さん、最期はご一緒だった？

賢治 え？
アヤ 妹さん。最期は……、
賢治 はい。俺が枕元でずっと、あいつの手ば握って。
アヤ ……お休みなさい。

アヤ、明かりを落とし、奥の座敷へと去る。

トシ 南無妙法蓮華経。南無妙法蓮華経。南無妙法蓮華経……。
賢治 トシ。そこさいるか？
トシ いるよ。兄さん。

*

賢治 夢かもな。
トシ 夢？（咳き込む）
賢治 馬鹿、おめえ、冷える。布団さ入れ。
トシ 熱いんだよ。身体さずっと火照ってる。

賢治、トシを布団でくるむ。トシに触れる。

賢治 トシ……また熱……、
トシ （結核） 移るよ。兄さん。でも、気持ちいい。
……、
トシ 今、何時？
賢治 夜中だ。風の音が聞こえるが？
トシ お母さんは？
賢治 もう寝た。俺ただけだ。
トシ 手紙ば読んでくれた？
賢治 ああ。読んでた。おまえからの手紙だば全部読んでた。返事、出せなくて悪かった。
トシ 分かってる。兄さんは忙しいもの。お話、沢山書けた？
賢治 トシ！ ……トシ！ 違うんだ俺は……おまえさなんて詫びたらいいか。…
トシ ……白状する。お前が苦しみの淵にいる時、俺は俺の苦しみの中にいた。自分の苦しみばかりと睦み合って、お前ば振り返れなかった。
トシ わたしもよ。…わたしも、私の苦しみと睦み合うため、手紙ば書いたの。
賢治 やっぱりわたし、このまま死んだら地獄さ落ちるね。
賢治 そつたなことねえ！

トシ
聞いて。手紙のことは全部ほんとう。でも……でも、書けなかったこともある。メールリンクが言ったでしょう？「過去に向かって何を企てること
が出来よう」、

賢治
「どのように努めても過去に行った小さい行為を取り消すことは出来ず、一
言のことも訂正することは出来ない」。

トシ
残酷だよ。過去はもう取り返しがつかない。どうすることも。この愚かで
どうしようもないトゲを抜くことは、もうできない。だから……懺悔を聞い
て。わたしの、その時が近づいても、謔言を口走らないように、

賢治
縁起でもねえこと言うな。

トシ
わたし……兄さんが思ってるほど、立派じゃない。兄さんと題目ば一生懸命
唱えても、心の中にはいつも、光の届かねえ暗い部分さある。そこにいるわ
たしが今も時々叫ぶんだ。あつだに嫌な思いたのに、恋なんてみつともね
え、無様な真似しなきゃよかったのに……わたし……わたし……まだ先生
ば。

賢治
トシ！

トシ
言葉にしちゃいけないのは罪だからでしょう。聞いて、まだ言葉にしてねえ
ことを。——わたしは、兄さん、……触れてもらいたかった。どうなっても
いい、先生に。

賢治
トシ、トシ！……やめろ！

トシ
助けて、兄さん。もっと強く、光の中さ連れてって。こつたな暗い影、焼き
尽くして。わたし、生まれ変わりたい。今すぐに蘇りたい。暗い淵もトゲも
光で照らして、清らかになりてえ。兄さんみたくなりてえ。

賢治
トシ……、俺は……俺だって……、

トシ
今度は、こつだに自分のことばかりで苦しまなあように生まれくる。

賢治
人を好きになることのどこが罪だ。んだば、俺だって修羅だ。

トシ
南無妙法蓮華経。

賢治
約束する。独りにはさねえ。おれも行くから。その道を、必ず行くから。…
…トシ！

トシ、安心したように笑う。

戸外に吹く風。

キミ、奥の座敷から起きてくる。

キミ
賢治さん？ ……起きてるの？

賢治
うん。目が覚めた？

キミ
お水。……町子さん、隣の布団で泣いてんだもの。起こされちゃった。

賢治
誰かを想う気持ち、トゲになって痛みを引き起こしても、決して、罪なん

かじゃねえべ。
罪だよ。

キミ

賢治

キミ

……、
おれ、正敏さんのこと、好きになっちまったんだもの。正敏さんつうのは、庄屋の坊ちゃん。今度、大学にも行かれるんだよ。来年には嫁さまも貰われるんだよ。

賢治

キミ

……、
おれねえ、村さ出る時、ホツとしちまったんだよ。弟に会えなくなるより、お父さんとお母さんの墓は離れるより、……これでようやく楽になれるって。おれ、きつと、地獄さ行くな。

トシ、キミの元へ行く。そっと寝乱れた髪を整えてやる。

トシ、出て行く。その行方を見つめる賢治。

(賢治の視線を追い) あ、——月が出てきたね。

キミ
賢治

……うん。

賢治、再び布団に入る。

キミ、奥の座敷に再び寝に戻る。

布団の中の賢治、烈しく震え——、

嘉内、現れる。賢治からの手紙を読む。

嘉内

「何度もお手紙を差し上げます。東京にいらした旨、お葉書、拝見いたしました。お目に掛かりたいのですがお訪ね出来ますか。見習士官なら外泊でしょう。どうです、日比谷か上野あたりの図書館でもお待ちしましょうか。」

誰かいるのか？

(手紙を見ている)

そこさいるのか？ 誰だ？ ——誰っしや？

工藤、外から入ってくる。

しっ。

——工藤さ、

声を出すな。頼む。

行かれたんじゃないですか？

足ヶ瀬まで行った。そこに村があつて……。電話を借りに来た。

工藤
賢治
賢治
工藤

賢治 電話？ こんな時間に？ みんな寝てます。
急を要する。

工藤 巳喜雄さんば起こしましょう。

賢治 電話が先だ。

工藤 なして！ なんのご用で？

賢治 ……足ヶ瀬で急病人だ。

工藤 それは。

賢治 工藤、座敷に上がる。奥に入っていこうと、

工藤 あの。戻ってくれてえがった。

賢治 ……、

工藤 町子さん、泣いてました。

賢治 工藤、奥の座敷へ入っていく。

嘉内 「私は変わらず、ゴソゴソの子供です。名誉ある軍人には、ご交際が不面目か
もしれません。それでもお待ちしています。宮澤賢治。——保阪嘉内様。」

賢治、そこにいる嘉内を見る。

窓から差し込む夏の午後の光。蝉の声。

大正一〇年七月一八日、上野図書館三階の閲覧室。

賢治 は——白亜紀の砂岩の斜層理（しゃそうり）、

嘉内 その輝ける断面について。……賢さん。盛岡以来だな。三年になるか。

賢治 四ヶ月！ 三年と四ヶ月ぶりです。

嘉内 変わってないな。

賢治 嘉内さんは……その……（笑う）。——軍隊の方はどうです？

嘉内 まあ、東京での演習は始まったばかりだからな。北上の方は良かったよ。ひ
とりに一頭、馬があてがわれてさ、ちよつとぐらい何かあっても、全速力で

賢治 駆ければ吹っ飛ぶ。

嘉内 なんだ、存外に。

賢治 うん？

嘉内 軍人さなるつもりですか。嘘です、冗談だ。

賢治 手紙、何通も。返事をしに来た。

嘉内 ……、

賢治 （息を吐き）賢さん、

賢治 待つてけらい。蒸すな、今日は。

嘉内 ……、

賢治 忘れてください。手紙のことばその——ちっと性急に書きすぎました。ほら、俺は書くとなるとずいぶん……、それに、あなたは軍隊にいるのに俺は……暇で。せつかぐ会えたんです。今日は愉快に過こしませんか。

嘉内 賢さん、

賢治 ……こ——国柱会には、なにも今すぐ入らねぐていいんです。兵役が終わって、落ち着いていらしてください。それまで俺は、下足番でもビラ貼りでもして待つてます。実家がなんと言ってきたって構いません。東京さ居座りますから。

嘉内 考えたよ。何度も。でも。

賢治 どうしたんです、保阪さん。あなたは約束を破る人じゃないでしょう。——

嘉内 あの夏を忘れたんですか？

賢治 覚えてるよ。岩手山。

嘉内 ああ。

賢治 約束。

嘉内 ああ！ まことの道を共に行く。

賢治 そのまことの道が、国柱会なのか？

賢治 国柱会は——つまり……環境です。覚悟です。世俗を棄て、ただ法華経に全生命を賭して、己を高める。

嘉内 だが、法華経を信じるヤツにも、利害打算の帝国主義者もいるだろ？ 要は

賢治 人間なんだ、賢さん。

嘉内 ……、

賢治 軍隊に入ってよく分かった。いろんな奴と話しもした。北上の演習地あたりの村も時間を見つけて見にいった。今の農村の荒廃をどう思う？ 資本主義の煽りを食って、荒み、飢えている。娘を売り、栄養失調で死に、あるいは自殺する。哀しく騙され、人間の誇りもなく死んでいくんだ。あまりに厚い雲に覆われて、一筋の光もないよ。賢さんは、国柱会で下足番をして、ビラをまいて……それで農村に光が射すか？ 人を救えるか？

賢治 救える！ 荒廃の源は何か、哀しみの源は何か。どこかにきつと原因があるのす。俺たちはそれを解き明かす。一生賭けても足りません。だからこそ俺は、

嘉内 (愛を込め) ……変わらないな、ほんとに。賢さんが見てるのは、岩手山の空より青い、大気圏の青だ。君の青だ。

賢治 嘉内さん、

嘉内 俺は、賢さんのように信仰一筋には生きられないよ。……強くなりたい。地にまみれたい。感傷はもういい、豚の脂を食って人の中で生きたい。鋤を持

ち、汗を掻いて、一片の題目より、一粒の種を植えたい。

賢治 それは——その強さは——法華経ば信じてこそ、

嘉内 神は俺の内にあるよ。

賢治 ……、

嘉内 兵役が終わったなら甲府に帰るつもりだ。俺は俺なりに農村の改善に取り組んでみるよ。ゆうべ、農業組合の人とも飲んだんだ。

賢治 ……嘉内さん、

嘉内 俺も、俺のまことを行くよ。

賢治 行かないでくれ！ なあ、嘉内さん……これで終わりか？ ——保阪嘉内。

保阪嘉内！ ……俺を棄てるな！

嘉内 宮澤賢治。俺たちはみな、独りだ。

奥の座敷で大きな物音と騒ぎ。

巳喜雄（声） おい、縛れ！

大悟（声） オラ！

工藤（声） 離——ッ！

嘉内、出て行く。

賢治 嘉内さん！

奥の座敷から、巳喜雄と大悟、工藤を連れてくる。

工藤は後ろ手に縛られている。

もがいて解こうとするが、さらに大悟、猿ぐつわを噛ませる。

町子がくる。

町子 俊ちゃん、

大悟 黙ってる！

アヤ（声） キミちゃん、来ちゃダメ！ そこにいて！

続いてアヤ・桐島が来る。

巳喜雄 こんな夜中に忍び込んで。まともな人間じゃねえべ。

賢治 その人は電話ばしにきただけです。足ヶ瀬で急病人が、

巳喜雄 急病人。電話じゃ違うごど喋ってたけどな？

工藤 （もがく）

町子 話させてよ！

巳喜雄 お客さん、この駅舎を預かる者として、俺が話します。静かにするか、奥さ
入って貰えませんか？

町子 嫌よ。

巳喜雄 桐やん。

桐島 わがった。

町子 ちよ——離して！

桐島、町子を奥の座敷へ連れて行く。

アヤ、賢治の傍に。

大悟

大体よ、最初ッから気に入くわねえべ。東京で仕事さクビになったからって、こつちさまんなよ。おめえらが流れてくるせいで、俺らの食い扶持までなくなる。

巳喜雄

ただの失業者じゃねえべ。おめえ、アカだべ。な？ 電話口で足ヶ瀬の誰かのごとさ言ってたな？

工藤 (もがく)

何企んでる？ 足ヶ瀬の百姓ば煽って、一揆でもさせるつもりが？

巳喜雄 (もがく)

まだかよ……。

桐島

桐島、戻ってきている。

桐島

おお俺ア、ふ——船中でこいづらにいいように使われた。党の指導者ばい
う奴が紛れ込んでよ、船中で俺たちにササ・サボさせたのよ。けどそい
づら、いざ水夫連中とぶつかる時におお俺たちば盾にしがって。最後、拳
銃までぶっ放して。

桐やん、

大悟 仲間、何人も死んだぞ？

桐島 落ち着け。

結局はおめえらも弱い者いじめでねえか。許せねえ。

桐島、工藤に掴みかかる。工藤、突き飛ばして逃げる。

桐島

クソ。逃げんな！

巳喜雄

桐やん！

桐島、工藤に向かうところ、仏壇の壺を武器として振り上げる。

アヤ
——やめて！

壺の中に入っていた幾つもの貝がらが座敷に零れる。

アヤ
(立ち塞がり)——。

桐島
……ああアヤさん……、

巳喜雄
この、(桐島を叩く)

奥の座敷から出てきた町子、工藤の猿ぐつわを外す。

大悟
あ、おい、

工藤
話しますよ。俺はアカじゃない。(後ろ)これも外して貰えませんかね。身分証も出せない。

巳喜雄
(頷く)

町子、工藤の拘束を外す。

工藤、隠し持っていた黒革の手帳を巳喜雄に見せる。

巳喜雄
……警視庁特別高等警察課、

町子
え？

工藤
足ヶ瀬に男が潜伏していた。去年の一〇月、大森であった銀行襲撃事件。アカどもが武装蜂起を企んで三万円を奪った。その残党だ。こんな時間に起こして、申し訳なかった。

巳喜雄
警察の方でしたか。……、

工藤
公務執行妨害とは言わん。あんたは駅舎預かりとして職務に忠実であろうとした。ここは東北山間部の要所だ。これからも頼む。

巳喜雄
……は……アヤ。お茶。

アヤ
お湯沸かさねえと、

大悟
んだば釜石の炭鉱さ行くづうのは、

巳喜雄
いいでは、

工藤
ある筋から話があった。明日——もう今日か。あと数時間で大規模な労働争議が始まる。党の上層部が潜伏してるらしい。

工藤、桐島の前に座る。

桐島

ヒ、

そう。あんたが見たのがあいつらの実体だ。革命なんて旗を掲げて、弱い者から金を吸い上げる。金はソ連のコミンテルンに流れる。この国を潰そうとするテロリストだ。——国民を救うのは国だよ。そのために今、大陸の最前線で刻一刻と事態は動いている。八紘一宇。アジア諸国を我々が導き、手を携えて栄えるために。充たされるために！

桐島

は、はい。

賢治、咳をする。身体を起こす。

賢治

……そうやってよその国に踏み込んで、その人だちのものば奪って自分だけ栄えることが、まことの道ですか？

工藤

あ？

賢治

向こうにも俺たちと同じ、弱い人たちがいるでしょう。なして、憎むことの出来ない人を殺さなくちゃならないんです。そんな人たちを殺してまで自分が生きるくれえなら、このからだ、焼き尽くされても。

工藤

……おい、

賢治

俺だつてまことの道ば探してる。でも俺は、なんにも出来なかった。なんにも。それで、もう多分死ぬでしょう。

アヤ

宮澤さん、

賢治

せめてなにか……なんとかしてえって思ったけど、あんまり無力で、身体も弱え、智恵も足りねえ。まづい風にしか生きられなかった。けどこんだけ言える。こんな世界にはしだくねえって風や空や地面の力さ借りて願ってきつた。死ぬまで、——死んでも、俺は願う。……人は死ぬんだ。誰でも。国もいつか亡くなる。白亜紀にオオトカゲたちの帝国も滅びたんだべ、永遠なんでものはねえ。この星もいつか遠い果てに消える。残るのはただ銀河系宇宙宇宙さ溶けた願いだ。

工藤

……(笑いだし)……、

工藤、笑う。静かに笑い続ける。

町子

町子、工藤を叩く。

町子

ひとつだけ。あたしは——あたしには、あんたがあたしにくれる花、あれだけがすべてだった。こんな年で、踊り子としちやもうあれで……でもあんたの花を飾ればまた一日誇りを持てた。あの花も嘘だった？

工藤、答えようとする。が、言葉は出ず——。

キミ、奥の座敷から顔を出す。

キミ お湯さ沸いたよ？

アヤ ……ありがとう。お茶、お願い。(貝がらを拾う)

桐島 アヤさん、手伝います。

アヤ いいの。触らないで。

桐島 ……だども、

大悟 (ほっとけ) あーあ。すっかり起きちまったな。お茶コくれ。

キミ はい。

大悟 夜明けさ、まだかな。

桐島 呑み直すか？

大悟 おめえ酒さ抜け？ 夜が明けたら、峠やつつけんぞ。

キミ んだよ。土どかすべ。

桐島 わがつてる。

巳喜雄 ……戸棚の奥さ、花林糖さあんど。

大悟 お！

キミ 花林糖つて？

大悟 おめえ……そっか(知らねえのか)。ほつぺた落ちんぞ！

キミ・桐島・大悟、奥の座敷へ。

工藤 大橋駅とは連絡取れてるんですか？

巳喜雄 ああ。あつちからも作業ば進めてる。夜が明けたら作業再開です。

工藤 分かりました。やりましょう。

巳喜雄 もう花卷さば行がねえんですか？

工藤 ええ。もう迂回はしない。

町子 なら頑張らないと。言っとくけど石どかすのすんごいキツイから。

工藤 ……町子。

町子 行くわよ。来る時あんた東北本線で言ってたじゃない？ 三陸の海岸線は一

生に一度は観るべきだつて。

工藤 悪かった。話せてなくて。でも俺は、

町子 話なら釜鉄の中で聞く。海、見るんでしょ？ ——♪磯の鵜の鳥や…、

町子と工藤、奥の座敷に入っていく。

奥の座敷から町子に合わせて、キミも口ずさむ。(「波浮の港」)

町子・キミ(声) ♪ 磯の鵜の鳥や 日暮れにゃ帰る

波浮の港にや 夕焼け小焼け……（二人笑う）

アヤ、座敷に散らばる貝殻を拾う。

賢治、貝がらにそつと手を伸ばす。

賢治 白いな。光つてる。

アヤ （微笑み）……うん、

巳喜雄 アヤがな……邦彦ば探しに行くたんび拾ってくんだよ。港はもう流されちま
ってなんもねえ。静かに打ち返す波と厚い雲——見渡す限り灰色で……色の
ねえ浜辺だ。浜辺の近くにな、傾いた松が一本だけひよろつと残ってる。た
だ一本、それだけが——そこに邦彦が居たって証しだ。

巳喜雄、煙草に火を点ける。

巳喜雄 よだの前の日、あいつ、ちようど非番だよ。俺が……泊まりがけで使いさ頼

んじまった。あの日でねくともいがったんだ、なのによ……。あいつ、行っ
てくるって峠さ登っていった。それが最後よ。真夜中、地震さあった。汽車
が爆走してるみてえなゴーツて音が遠くでして、こいつはいづもの地震じゃ
ねえって分かった。峠もまだ落石さあつて通れなくなつて、二・三日してか
ら釜石の海ば行った。

賢治 花巻も揺れましたがそこまでじゃなかった。……沿岸のことは新聞で見まし
た。

巳喜雄 酷かったな。酷いなんてもんじゃねかったな。波打ち際さ、魚の群れが腹ば
見せてギッシリ横たわってる。よく見ると、そりゃ魚じゃねえ。裸の死体だ。
引き千切られて、膨らんで、腐りかけて……海鳥だけがギヤアギヤア騒いで
る。俺とアヤは邦彦ば探して歩った。そんでよ、俺の馴染みと云つたんだ。
そいつと邦彦はな、もやい舟さしがみついて助かってたんだ。けど流され
てる親子ばいて……、その人だち舟さ乗せるために、邦彦は自分から舟を降
りたんだ。木切れさ掴まった邦彦が、松の木さぶつかつて、その枝さしが
みついたのは見た。あとは、なんも分からねえって。——今も、その松見る
度にな……あいつはここに居たのかつて、しがみついていたのかつて……。

賢治 ……はい、

巳喜雄 だども、さっきのあんたの言葉聞いたら、俺アはじめて——あいづ、やりき
ったんだろうなあ。悔いはねえんだろうなあつて——あいづはもう……ここ
さはいねえ気がして……、

アヤ ……お義父さん、

巳喜雄 峠ば見てくる。

曰喜雄、外に出て行く。

アヤ

ほんと、答えないことを繰り返すしかないのよね。……こんなの集めても、いくら集めても何にもならないって分かってるのよ。ただこうしないと、あの人がほとんど薄まって……ここから、あの人が消えてくから。——宮澤さん。あなたは会えた？ 北の果て、終着駅の海辺で、妹さんは見つかった？

賢治、原稿用紙を手取る。

遠く響き出す波の音。

八、メンタル・スケッチ ⑤

賢治が読む原稿 『グスコープドリの伝記』

賢治

「その年、どうもあの恐ろしい寒い気候がまた来るような模様でした。みんなはもうこの前の凶作を思い出して生きたそらもありませんでした。ブドリは、まだ黄色なオリザの苗や芽を出さない樹を見ますと、居ても立っても居られませんでした。このままで過ぎるなら、森にも、野原にも、あの年のブドリの家族のようになる人がたくさんできるのです。

『先生、カルボナード火山島がいま爆発したら、この気候を変えるくらいに炭酸瓦斯（ガス）を吹くでしょうか。』

『それはできるだろう。けれども、その仕事に行ったものうち、最後のひとりはどうしても逃げられないのですね。』

アヤ、賢治と共に原稿を読む。

アヤ

『先生、私にそれをやらせてください。私のようなものは、これから沢山できます。私よりもっともとなんでもできる人が、私よりもっと立派に美しく、仕事をしたり笑ったりしていくのですから。』

——アヤ、賢治が残した原稿の数々を読んでいく。

賢治

「それから三日後、火山局の船が、カルボナード島へ急ぎました。そこへ幾つものやぐらは建ち、電線は連結されました。すっかり支度が出来上がると、ブドリはみんなを船で返し、じぶんはひとり島に残りました。」

遠く火山の爆発。

ブドリは火の中で木っ端微塵になる。
火花のように散っていく火の粉。

賢治の目に映る、原稿を持って共に読んでいるトシ。

トシ 「次の日、イーハトーブの人たちは青ぞらが緑いろに濁り、日や月が銅（あ
かがね）色になったのを見ました。けれどもそれから気候はぐんぐん温かく
なって、たくさんのブドリやネリたちは、その冬を楽しく過（す）ことが出来
たのでした。」

賢治 トシ。

兄さん。何も、木っ端微塵になることはねえのに。

賢治 『このからだ、そらのみぢんにちらばれ。』

トシと賢治、笑い合う。

賢治 おめえがいなくなったあと、俺はいっぱい童話を書いたよ。おめえにはもう
届かねえけど、俺の中のおめえがいつもいつも読んでくれた。書くときはい
つだっておめえが居たんだ。

うん。

ずっと、おめえに謝りたかった。

なして？

たったひとり逝かしちまったこと。おめえは迷いもなく青く澄んだ道を辿っ
ていった。俺はおめえをその道さ誘ったくせに、薄暗い迷いの中をいづまで
も彷徨ってる。……嘘つきの罪人（つみびと）だ。

（笑う）

いまからでも、題目、いつペえ唱えるから。

そんなことしなくても、兄さんはもう赦されてる。ううん、最初から、罪人
なんかでねえよ。

でも俺は、悔いばかりだ。

その悔いが、お話しさなっただべ？

――

兄さん。願いはね、生きてる者だけの特権じゃねえよ。花や風、星とひとつ
になつて見えなくなった者たちも、愛する人のために願うよ。私も兄さんに
言いたかった。この星の――青い空と海の中、島々からなる小さな国の、東
北にあるイーハトーヴ。そこさ住む、私の兄さんが守られますように。――兄
さんの願いが叶いますように。

トシ、再び原稿を読み、

トシ

「グスコープドリは、イーハトーブの大きな森の中に生まれました。ブドリにはネリという妹があつて、二人は毎日森で遊びました。二人はそこで、」

賢治

「木苺の実をとって湧水に漬けたり、」

トシ

「高く歌ったりしました。」

トシ、原稿を賢治の元に返す。海の方へ還っていく。

賢治

トシ、俺もじきに行くから。待っててけろ。

トシ

来なくていい。……でも怖がらないで。……この空はね、晴れ渡ってるよ。

トシ、去る。

波の音が消えていく。

原稿を読んでいたアヤ、顔を上げる。

アヤ

宮澤さん。あなたは作家だったのね。

賢治

はい。本は詩と童話が一冊ずつ、ほんの自費出版で出したようなもんだけんど。妹とは——トシとは、北の果てさ行っても会われねがつた。んだども、あいづはずつとここさ居たんだ。……ここさ居る。

いつのまにか、窓から差し込んでいる朝の光。

アヤ

ああ、夜が明けるね。

賢治とアヤ、窓の外を見る。

九、峠⑤

四日目の朝。

座敷いっばいに差し込んでいる朝の光。

座敷からは賢治の布団がなくなっている。

外から、旅装を整えたキミ、水桶を持ってきて土間の桶に水を入れ

る。

キミ

アヤさん、水は足しときました！

奥の座敷から同じく旅装を整えた町子、出てくる。

町子 元気ねー。
キミ 出発びよりですよ！
町子 きのう石運んだのが腰に来てんのよ。もう一泊したいー。
キミ 齢だな。
町子 ああん？

奥の座敷から巳喜雄と工藤、来る。

工藤 それじゃ便鉄も今日から復旧ですか。
巳喜雄 はい。始発から予定通り運行だそうです。汽車さ来る前にホームば掃除しねえど。
工藤 忙しくなりますね。
巳喜雄 毎日のことですから。この三日の方が堪えました。
工藤 確かに。

一服終わった旅装の桐島、外から顔を出す。

桐島 おう、早く歩き出ねえと昼までに大橋駅さ着けねえぞ。
町子 しょうがない。行くか。
工藤 荷物。(町子の荷物を一つ持ってやる)
巳喜雄 (奥に) アヤ、お発ちだぞ。

アヤ、奥の座敷から小さな包みを持って出てくる。

アヤ 待つて、これ。——お握り。皆さんの分入れましたから食べて。
キミ (受け取り) あったけえ。お世話になりました！
アヤ 頑張つてね。キミちゃん。
キミ はい。
町子 ふん、どんな店か町子姐さんが見てやるわ。
キミ (笑顔に)
町子 そんじゃね。
工藤 (会釈)
巳喜雄 道中お気をつけて。そこまで(見送りに)。

キミ・町子・工藤、出ていく。巳喜雄、見送りに出ていく。

桐島 あ、ああアヤさん。

アヤ はい？

桐島 その——また来てもいいべが？

アヤ いつでも。便鉄ご利用の際はぜひ。

桐島 んでねぐで！ 俺……アヤさんのことが、

アヤ ありがとう。でも私、まだひとりじゃないの。仙人峠に線路が通るのを見たいのよ。お義父さんとあの人の夢だから。

桐島 ……んだな。んだなア！

巳喜雄、戻ってきている。

巳喜雄 おう桐やん。

桐島 ！

巳喜雄 おめえの故郷、変わっちまったが頑張れよ。海の方さ、まだまだ男手が必要だから。

桐島 わがってる！ 行ってきます。

桐島、出ていく。

巳喜雄・アヤ (二人、眼差しが結ばれ) ……、

キミ(声) 賢治さん！ 先行ってるよお！

旅装の身支度を整えた賢治、奥の座敷から出てくる。

アヤ ほんとに行くんですね。

賢治 はい。熱も下がったし。お世話になりました。

賢治、荷物を持つとうとして、重さにふらつく。

巳喜雄 大丈夫か？ やっぱしお家さ連絡ばした方が、

大悟、表から入ってくる。

大悟 おう、馬、連れてきたぞ。

賢治 ありがとうございます。

大悟 大丈夫か？ 馬も結構揺れるぞ？

賢治 タテガミさしがみついていますから。

大悟 (じゃなくて) 具合、悪くなったらすぐ言え？
賢治 はい。
大悟 んだば前払いだ。大橋駅まで三円。
アヤ ちよ、大ちゃん、高すぎ、
大悟 五円払えば、荷物持ちと一緒に釜石まで行ってやる。
賢治 分かりました。んだば一〇円。
大悟 え？！
賢治 一緒に教え子のとこまで行って、俺の代わりに畑さ入ってください。
大悟 よし！

大悟、賢治から金を受け取り、帳場に叩きつける。

大悟 だりやあ！ 金ば返したぞコンチクショウ馬鹿野郎！
巳喜雄 うるせえ。

(笑う)

賢治 心が急くな。峠のてっぺん行けると思うと。
大悟 ま、晴れた日の景色はちよっといいがな。

賢治 昔はよく釜石の叔父のところに行ったんです。峠のてっぺんじゃ白樺が枝を東の空に伸ばして、枝と枝の間から釜石の海が見える。一粒のエメラルドみたいな。……あの海の名前、ご存知ですか？

大悟 釜石湾。

賢治 パシフィック。平和の海という意味です。

巳喜雄 へえ。そつたな名前が……。

大悟 じゃ、行きましょうか。

賢治 ほんとにありがとうございました。さよなら。

アヤ 気を付けて。行ってらっしゃい！

大悟・賢治、出ていく。アヤと巳喜雄、二人を見送る。

巳喜雄 さて。ホームさ掃除してくるか。

アヤ うん。私も。客用の布団、今のうち干しておきます。

巳喜雄、表に出ていく。

アヤ、奥の座敷へ入っていく。

やがてアヤ、奥の座敷から駆け出してくる。その手には、一冊の本。

アヤ 宮澤さん！ 忘れものです。……宮澤さん！

アヤ、外に駆け出してみるが、とつくにその姿はない。
座敷に戻ってくるアヤ、本の表紙を撫でる。

アヤ 『注文の多い料理店』宮沢賢治。（本を捲り）――、

遠く、汽笛の音。

巳喜雄、外から戻ってくる。

巳喜雄

アヤ、始発ば来るぞ！

アヤ

はい！

アヤ、本を閉じる。

二人、始発の客を迎えるために動き出す。

これまでと同じ、そしてこれからも続いていく駅舎の呼吸。

アヤ、窓を開ける。

近づいてくる汽笛の音――。

へ了へ

〈劇中引用〉

宮澤賢治 書簡・短歌・『農民芸術概論』・『グスコブドリの伝記』

宮澤トシ 書簡

保坂嘉内 短歌